

ひきこもり博士の
[ハロプロ]
[萌え]
[エヴァンゲリオン]
研究日誌

内容見本

目次

序文.....	5
萌えはお菓子.....	9
第一章 萌え.....	10
第二章 オタク.....	16
第三章 お菓子.....	22
あとがき.....	27
参考文献.....	29
おまけ（二版あとがき）.....	30
はてな☆オタク.....	35
はじめに.....	36
インターネットの登場.....	37
インターネットが苦手.....	37
ブログ以前.....	37
はてなに移った.....	39
はてなキーワード.....	40
はてなブックマーク.....	42
Web2.0.....	44

はてな村とは.....	46
はてなとハロプロファン.....	47
はてなブックマークを使わない.....	48
アイドルファンはオタクなのか.....	49
はてなにはオタクが多い？.....	51
オタクはすでに死んでいるという.....	51
なぜはてなは居心地がいいのか.....	52
あとがき.....	54
はてなの沿革.....	56
ひきこもりのアイドル論.....	57
ドリームモーニング娘。.....	59
ひきこもりのつぶやき1.....	63
小室哲哉.....	64
ひきこもりのつぶやき2.....	69
モーニング娘。をテレビで見た.....	70
アイドルはキャラクターか？.....	73
ひきこもりのつぶやき3.....	74
アイドルの自主性.....	76
ひきこもりのつぶやき4.....	78

ハロプロの歴史をごく簡単に.....	79
ハロプロらしさとは.....	81
出会いと別れ.....	83
人類補完計画.....	86
ひきこもりのつぶやき5（あとがき）.....	87
さよなら、エヴァ.....	91
はじめに.....	92
壱 新世紀エヴァンゲリオンとは.....	94
弐 綾波レイ.....	96
参 マクロスを見た頃の話.....	100
四 ググらない自分.....	105
伍 二次創作を読まない理由.....	112
六 庵野秀明とは.....	114
七 さよなら、エヴァ.....	116
八 後日談 新劇場版について.....	121
あとがき.....	126
参考文献.....	129
個人誌執筆裏話.....	131
あとがき.....	141

こんにちば、萌えぎのエレンです。これまでに自分が感じた色々を「棚卸し」するために企画し、「はなごよみ」で出した四冊のコピー誌。他人にとつて「どうでもいいこと」に「ごだわる」自分のありさまを残しておきたい。そのような思いがあつて、今回、それらを一冊にまとめました。まとめるにあたり細かい修正を行っていますが、基本的に執筆当時の気分を尊重しました。

タイトルに「博士」とありますが、これはあだ名のようなもの、つまり洒落です。本物の博士ではありません。

タイトルにあるブラケット括弧(□)は、はてなブックマークの「タグ」を意識しました。はてなユーザーにしか分からない例えですが、ユーザーなら「にやり」とするだろうと考えている。ぼくは、そのような、はてなユーザーです。

とにかく、この同人誌は、ここ数年ひきこもり生活を送っている自分が、インターネットから感じた色々のまとめになっています。

『萌えはお菓子』

二〇一〇年八月十五日頒布開始。「2版あとがき」を加え二〇一〇年十二月三十一日再販。

アニメや漫画の少女などに対する萌えという思いとは、実

在する女性を好きになることと同じなのか違うのか。そんなことを考えて、例えば萌えとは「主食」じゃない「お菓子」のようなものだろう。それがぼくの思いつきでした。オタクと「ヲタク」の違いについても簡単に説明。特にむずかしいことは書いていない。岡田斗司夫と桃井はるこからの引用が多い。なお、参考文献として引用したウェブページのなかに現在閲覧できないものがありますが、本書では訂正せずに当時のまま掲載しました。

『はてな☆オタク』

二〇一一年六月十二日頒布開始。

個人誌の二冊目。ぼくが好きな株式会社はてなについて。はてなユーザー同士の採め事についてウェブでたまに話題になるが、そのことはあまり書いていない。はてなでは採め事が起こることが多いという印象をお持ちのかたがいらっしゃるかもしれませんが。ウェブ全体で採め事が起こっているなかで、はてなのそれは目立っている。それでもぼくは、はてなが好きということ。

はてなにはオタクが多いという仮説がぼくのなかにまずあつて、ぼくがインターネットを始めてから現在のハロプロファンに落ち着くまでの経緯。はてなにハロプロファンが多い

理由についても、ぼくが知っている範囲で書きました。

『ひきこもりのアイドル論』

二〇一一年十一月三日頒布開始。

ついに出たアイドル本。ある皆さんに描いて頂いた表紙が素晴らしい。

タイトルに「論」と付いているが、これは洒落みたいなもので、中身はエッセイ、自分語り。そして、アイドルといってもハロプロのことしか書いていない。ハロプロを好きになつて十年になりますが、この十年に起こったことを簡単に紹介しつつ、結局はぼく自身がどうしてハロプロを好きなのか、好きでいられるのかを中心に書きました。

『さよなら、エヴァ』

二〇一二年五月六日頒布開始。

萌え、はてな、ハロプロ。そしてそれらを語るきっかけは、エヴァだった。特に『ひきこもりのアイドル論』と『さよなら、エヴァ』は、ぼくのなかで対になっている。そして、ぼくの自分探しの旅はエヴァから始まったということを、伝えたかった。

エヴァのことはもちろん書いているが、ぼく自身が執筆し

ていて気づいたこと、ぼくがどうしてインターネットでの検索が苦手なのかという話から、ぼくはエヴァの二次創作に興味がない理由など。

『超時空要塞マクロス』からオタクになった、いわば年寄りのつぶやき集。どうしてぼくが永野護を好きになったのか、なども書きました。

キーワード

四冊の個人誌を通して、ぼくが数多く言及するキーワードについて、簡単に説明しておきます。

ネット

インターネットの略語。拙著ではウェブと表記する場合あり。意味は同じ。

おたく

オタク、またはヲタクとも書く。発音は同じ。定義はばらばらでいまだ統一した記述はなされず現在に至る。ぼくも冊子によつて（執筆時の気分で）「おたく」だったり「オタク」だったりと安定していない。

モーニング娘。

女性歌手グループ。「ハロー!プロジェクト」(ハロプロ)の筆頭集団。アイドルとも呼ばれる。「」までが名前。文中では、彼女たちのファンがそうするように「」を省略せずに表記。

エヴァ

アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』、そしてその新作『エヴァンゲリオン新劇場版』(こちらは「エヴァ」表記になることあり)の略称。

ファイブスター物語

ぼくが唯一読み続けている漫画。個人誌でこの作品について何か書いているわけではないが、ぼくの考え方のバックボーンとなっている。例えば、ぼくのなかでモーニング娘。とファイブスター物語は「ロック」というキーワードで繋がっている、同一のもの。しかし、それは説明不可能だ。だから書かなかった。



生活必需品じゃないけど、ニコニコ笑顔にする、それが「萌え」！

「萌え」について意外な発見ができる一冊です。

(ウェブサイト紹介文より)

アニメや漫画のキャラクターの可愛らしさに、条件反射するように、喜び、もだえる、そういう感情をオタクは萌え（もえ）と呼ぶ。ぼくはそう考えています。そして萌えとは、お菓子のようにスイートなものなのだろうと、ぼくは感じています。

この本では、ぼくの感じる萌えについて書いてみました。第一章で萌えについてインターネットで書かれているようなことのおさらいを行い、第二章では萌えと深く関連するオタクについての考察を試みます。そして第三章では、ぼくが感じている「萌えはお菓子」という持論を展開します。

はじめにお断りしておきますが、この本の文章は、ぼく自身の感じ方と、萌えオタク（オタクのなかで萌えを感じている者たち）はおそらくこう感じているだろうという憶測が、混ざっています。また、特に新しいことは書いていませんので、オタクの現状とのずれがあるかもしれません。

そうではあるのですが、今ここに、ぼくが感じた萌えを書き残しておきたい。そういう思いで執筆しました。

第一章 萌え

萌えとは？

アニメや漫画などのキャラクターを見て、可愛らしさや憧れやときめきなどを感じたときに、自分のなかで反射的に高ぶる、内なる感情であり、それは同時に、対象となるキャラクターの「可愛い」に対する高い評価となっている。オタクのひとりでもあるぼくは、萌えというものを、そのようなものであると、とらえています。

萌えという言葉は、略語である、とぼくは考えています。例えば、「綾波萌え」と言うのは、綾波レイ（アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』のヒロイン）に、ぼくは萌えを感じている、という意味です。ですから、萌えとは、「萌えを感じている」「萌えている」の略語なのです。

萌えの対象とは、架空の存在（キャラクター）、または声優やアイドルタレントなど、手をふれることができない者に限られています、ぼくは感じています。アイドルには握手会がありますが、ここでの「手をふれる」とは、そういう意味ではありません。デートしたりセックスできないことが前提となっている、いわゆる偶像に対する、あくなき切ない願い。

だから、片思いのような感情が、どこまでも加熱する。それが萌えなのだと思います。

そして、そのような仮想空間での思いである萌えが高まると、その対象との関係が「脳内恋愛」や「俺の嫁」となるオタクもいるようです。

そのキャラクターの外見上の特徴（服装など）や、置かれている状況（設定や性格など）が、萌えをより強力に誘発することもあります。それらは「萌え属性」と呼ばれています。代表的なものに「妹」「メイド」「ドジ」「メガネ」などがあります。

ここでのいうメイドとは、十九世紀のイギリスの使用人（メイド）の服装のようなエプロン姿（通称メイド服）の女性のことです。そして、「メイド喫茶」で働いている、メイド服を着た女性従業員のこともあります。このメイド喫茶は、後の萌えブームの発端のひとつになります。

ところで、萌えとフェティシズムとの違いは、あまり知られていないようです。ぼくの見解では、例えば、メガネ萌えのオタクは、眼鏡をかけたキャラクターが好きなのであって、眼鏡そのものをコレクションすることに熱意を注いだりはないだろう、だから萌えとフェティシズムは違う、というものです。この違いについては、オタクの間でもさまざまな解

釈があるようです。

猫に萌える、工場に萌えるなど、人間以外にも萌えは適用されています。特に、可愛い猫の画像は、オタクであるかどうかにかかわらず、インターネットでは一定の人気があるようです。

萌えの起こり

キャラクターに対するオタクの愛情表現が、萌えのような簡単な言葉になったのは、パソコン通信の時代からであるといわれています。パソコン通信とは、ごく簡単にいうと、文書だけで会話をするインターネットのようなもので、現在のようにインターネットが普及する以前の、一九八〇年代後半から一九九〇年代前半が、その最盛期でした。

当時、どうして萌えという言葉が生まれたのでしょうか。アニメなどの熱血する展開を「燃える」と言うオタクが多くいて、その「燃え」が「萌え」に転じた、または、名前に萌の字が入っている声優が由来、など、諸説あるようです。文字データの量⇨通信費だったパソコン通信では極度に簡略化された言葉が好まれていたので、語感の響きが良いと感じられた略語「萌え」が、またたく間に広まったということが考えられます。また、オタクには、意味もなく「お」を「を」に

置き換えるなどの言葉遊びを好む傾向があるので、萌えという言葉も、その流れに乗ったのかもしれない。

ここで、パソコン通信時代のオタクを知る証人のひとり、歌手の桃井はこの発言を引用します。

90年代後半、パソコン通信の世界で「くうく」という言葉が流行しました。アニメのキャラやアイドルの可愛さに身をよじる様を表現したものです。その後、その言葉は「萌え」に置き換わっていきました。（わたしが最初に見たのはニフティサーブでの椎名へきるさんのライブビデオ実況で、でした。^①）

桃井は、マスメディアで初めて萌えという言葉を使った人物は彼女自身ではないかと、当時をふりかえっています。それは、テレビ朝日系列で放映されていた番組『D's Garage 21』で、一九九九年の四月だということです。^②つまり、すでにこの一九九九年の時点で、萌えは知るひと（オタク）ぞ知る言葉であったということが、うかがい知ることができます。パソコン通信が、やがてインターネットに代わり、ブロードバンド回線や携帯電話の普及もあり、インターネットは郵便や電話のような、一般的なインフラとして定着してきました

た。

本来「萌え」って、視覚から来る刺激に対する書き言葉だと私は思うんです（中略）私の認識では、「萌え」はやっぱりネット・スラングなんですよ。^③

桃井の言うように、萌えはオタクのネットスラング（隠語）になります。ここで隠語とするのは、オタク以外の者がそれを読むことがネットではあり得るからです。つまり、これまでは、オタクの会話をオタク以外の者が読む（聞く）機会がほとんどなかったので、隠語でさえなかった（まったく知られることがなかった）のです。

桃井が萌えがネットスラングだとするのは、萌えと実際に口に出して言うオタクがほとんどいないことも関連しています。オタクが萌えと口にしないのは、恥ずかしさや照れがあるのかもしれないし、桃井が指摘するように、それはつまり、書き言葉だからなのです。そして二〇〇四年以降の、世間一般レベルでの萌えブームの頃には、もはや萌えと書かなくとも（萌えオタク間では）通じるところにまで来ていました。萌えという概念は萌えオタクの間では浸透しているので、わざわざ言わなくても（書かなくても）済んでしまうという

する、条件反射のような感情で、架空のキャラクターに対してのみ使用される。

萌えと二次創作には、何かしらの関連があるらしい。

萌えには性的な妄想が含まれることもあるが、それは萌えの絶対条件ではない。オタクごとにさまざまな解釈があつて良い。

萌えの詳細な定義は、オタク個々人によつて異なるが、おおまかにいうのなら、それは「キャラクターに対する恋のようなもの」で良いのではないかと、個人的には感じています。

第二章 オタク

萌えがオタクを減ぼした？

オタキング（オタクの王様）を名乗り、これまでにオタクについての著書を数多く執筆してきた作家の岡田斗司夫は、萌えオタクがオタクをダメにしたのだと、著書『オタクはすでに死んでいる』で、述べています。

萌えについてわからないという岡田は、若いオタクから、オタクの専門家なのにわからないのはおかしいと言われる。萌えは確かにオタクの流行の一部なのだけど、それがいつの間にかオタクの中心として語られている。萌えがオタクの中心だと信じる若いオタクは、萌えがわからないオタクを排斥しようとしている。岡田の考えていたオタクとは自分の考えを他人に押し付けるような「頭の悪い」ひとではなかった。

この著書にも書いてあるように、岡田はオタクの印象を良くしようと奔走し、これまでに多数の著作にて「オタク＝個性的で頭が良いからカッコいい」という主張を繰り返してきた。それが最近どうやらバカなオタクが増えてきたらしいので、もうオタクの弁護をするのはやめてしまおうというのです。

岡田は萌えを否定しているわけではないのです。だけど、萌えがオタクの中心だとするのなら、軍事オタクや鉄道オタクはオタクではないことになるから、それは違うだろう。そこが、岡田の抱える違和感なのだと思います。

自らオタキングを名乗り（つまりピエロになって）、叩かれる覚悟でオタクを擁護してきた岡田の落胆は、ぼくにもわかる気がします。

岡田によるオタクの定義は、このようなものでした。

子供っぽい趣味を選び、それに關して、精神力と知性でもって世間の目に対抗していく存在だということです。「みんなが好きなものというのは人から与えられたもので、みんなから仲間外れにならないために選んだようなものだけど、私たちは違う。自分が好きだから選んで、いまだに差別があつても選びつづけているんだ」こんな自意識、自負心があるのがオタクだと思ってきました。¹

岡田は、萌えのわかりやすさがオタクをダメにしたのだろうとも考えています。それは、わかりやすいものとは低俗だ、というような見解であり、また、彼にとつてオタクとは、貴族

としての誇りがあるので困難な道を歩む宿命を背負う者（SFを知るには原書のSFを千冊読まなければならないなど）だったと、いいます。

ぼくは、それはあまりにも理想論だろうと考えていましたが、理想を掲げることは決して無駄なことではありませんし、そういう岡田について行こうとも思っていました。

ですが、ここでオタクが死んだと宣言するのは、彼なりの格好のつけかただと、ぼくは受け取っています。

1 『オタクはすでに死んでいる』一三八頁。

オタクは女性化しているのか？

岡田による萌えの定義は、こうです。

単に「美少女っていうのは可愛いなあ」と思つて気持ちが盛り上がるというだけではなく、「こんなものまで好きだといつて気持ちが盛り上がるなんて、可愛いなあ俺は」と「こんなのがわかる、萌えられる俺つて素敵で面白いな」という感覚です。つまり単純な「好き」ではなく、かなりのメタ的な視点、外側にある視点までも含んでくれているもの。なおかつ、少女的な「可愛い」

第三章 お菓子

萌えとは甘い何か

さて、ここからは、持論です。実際には「論」以前のレベルかもしれませんが、ぼくが感じていることだと思ってください。第一章と第二章で書いてきたことを前提に、ぼくが漠然と感じている、萌えという「何か」についての、希望を書いてみたいと思います。

萌えとは甘い何かであるらしい。だから、例えるなら、萌えとはお菓子のようなものだ、ぼくは感じています。今までの、オタクはどうこうという、インターネットで定番となっているような話とは、やや離れるかもしれませんが、それでも、ぼくのなかでは、萌えはお菓子だという例えが、適切だと感じるのです。

生活必需品ではない、なくても生きていけないわけではない、だがしかし、あると生活を豊かに、幅広いものにする。そのようなお菓子とは、ひとびとに安らぎを与えるものです。萌えも、なくても生きていけるけれど、あつたほうが心が満たされる。そのようなものであつて欲しいという、ぼくの願いがあります。

お菓子がどうしても食べたくてたまらない。そういう衝動にかられるときがある。それも「感じる」こと優先の萌えと共通するのもかもしれない、というふうにも思うのです。

お菓子の魅力

ここでは、まず、お菓子についての一般的な定義のようなもの、お菓子の魅力を書いてみます。

キャンディ、スナック菓子、アイス、ケーキなど、たいていの子供はお菓子が大好きです。友達の家遊びに行つたときにみんなで食べたり、学校の帰りに買い食いたり、そういう経験は誰にでもあるでしょう。また、大人であつても、お菓子が嫌いというひとよりも、好きだというひとのほうが多いのではないのでしょうか。

雑誌に取り上げられた高級なケーキ(スイーツと呼ばれる)や、子供の間でブームとなつたお菓子が、たちまち売り切れてしまうようなことも、よくあります。また、森永キャラメルやグリコのポッキーや明治製菓のカールのように、永い間親しまれている定番のお菓子もあります。

とにかく、お菓子は、ずっとひとびとに好まれ、愛されてきました。

そのお菓子の魅力とは、甘い味です。お菓子には砂糖がふ

物を砂糖漬けにして保存するコンポートやジャムがあります。そして煎餅やビスケットやバームクーヘンも、もともとは保存食として生まれたものです。

そこで、保存というキーワードで萌えを考えてみます。萌えキャラを、例えば少女の美しさや躍動など、それらを（かつてお菓子がそうしてきたように）「実在する少女の可愛らしさを加工して長期保存する」といった、およそ不可能な欲望の産物であるのだと、考えてみたいのです。

萌えアニメや萌えキャラとは、萌え要素の組み合わせにより構成されるイメージの産物であります。それぞれの萌え要素とは、いつてみればケーキの材料でしかありません。萌えとは少女のイメージであり、イメージとは理想であり、実態よりも優れたものです。そのイメージとは、少女という概念の拡大解釈であるともいえます。それが単なる妄想であるといつてしまえばそれまでですが、描かれることで出現する萌えキャラとは、イメージの具現化、言い換えれば少女というイメージの保存でもあるのです。

萌えとは、恋の代替品なのでしょうか。インターネットでよくみられるオタク自身による萌えの定義のひとつ「恋心、またはそれに非常に近い感情」とは、何なのか。それは、恋心そのものではないのか。そこが、萌えがよく理解されない、

最も重要なポイントなのだと思います。「恋心、またはそれに非常に近い感情」と「恋」には、どのような違いがあるのでしょうか。

そもそも、恋とは、例えば、愛との違いがあるのでしょうか。好意を抱く異性に対し、その感情が恋から愛へと変わる、と、いいかたがなざれることがあります。それは、一般的に、憧れの異性との交際へと発展する過程で、その思いが、一方的な恋心から次第に深い愛情へと発展していくものだと、されています。そして、親密な交際を経てやがてそのカップルが結婚し、お互いが愛情で結ばれている状態であるとき、しかし、その時点ではお互いに残されている恋心というものは、社会生活、共同生活という平凡な日常に埋没され、やがて失われてしまうと、ぼくは考えたことがあります。

ある異性に恋をするということは、対象の実態を知り得ない時点で発生してしまう誤解からはじまる、一種の幻想であるともいいます。ですから、恋とはすなわち、対象に対するイメージが優先されるということになるでしょう。萌えという感情が発生する対象とは、アニメや漫画のキャラクターやアイドルなどの偶像に限定されると仮定するとします。

偶像とは、イメージによつてのみ構成される存在であるのなら、つまり萌えとは、恋という概念そのものであるとも、



「どうしてはてなにはオタクが多いの？」

- ブログとブログをつなぐ、はてなキーワード
- ただの URL メモではない！ はてなブックマーク
- はてなアンテナとハロプロファン
- オタクに居心地の良い、「はてな」の世界

「はてなは何だかオタクっぽい雰囲気 사이트らしいけど、
どんな雰囲気の人が集まって、どんな事してるの？」
という疑問のヒントを与えてくれる冊子です。

(裏表紙紹介文より)

はじめに

たまにインターネットで書かれている「コンテンツは話題作りのために存在している」中身そのものはどうでもいい」のような最近の俗説を読むたびに「どうでもいいわけないだろう」と思うのです。

ただ現実には、例えばぼくはハロプロ（ハロー！プロジェクト）のファンなのですけれど、アイドルである彼女たちさえいればいい（ただ観賞するだけでいい）というだけでなく、このぼくがネットで何かを考えた感じたことを書くことが重要なのだと、感じる自分もいるのです。

ぼくは、はてな（株式会社はてなが提供するウェブサービス）でブログを書いています。最近ツイッターばかり書いていますが、基本的にホームははてなですし、やめるつもりはありません。ハロプロメンバーのブログをチェックするのに都合がよいのでアメーバやグリーのアカウントも持っていますが、そこでブログを書くことは、まずないでしょう。

ところでぼくは、ネットを始めた当時、ネットというものを信頼していませんでした。信頼していいは大げさですが、あまりいいものだと思っていなかったのです。ネットがいいものだと感じ始めたのは、はてなを利用するようになってからでした。

はてなは、他のウェブサービスと比べて、多少くせが強いかもしれません。それもあって、はてな内部のコミュニティには独特の雰囲気があります。揉め事のようなこともたまにみられますが、ぼくにとっては概ね良好な場所であり、はてながきっかけで知り合えた友人も多いです。

そして、はてなを居心地がよい場所だと感じるのは、オタク的な何かを引き寄せるちからのようなものがあるのだろうと考えることがあります。この本では、そのようなことを含めて、ぼくがインターネットをどうとらえているかについて書いてみたいと思います。

インターネットの登場

ぼくがインターネットを使い始めたのは、一九九九年くらいでした。アニメが好きだったけどいったん離れて、エヴァのブームで復帰して、ナデシコ、ウテナ、アキハバラ電脳組と見てきて、またアニメから離れて、モーニング娘。のファンになってしまった。その頃だったと思います。

実はパソコン通信はやっていませんでした。そういうものがあることは知ってはいましたが、知り合いでもない人間と話しをするという面白さがわからなかったし、何か怖いものを感じていました。それでもやがて、インターネットという面白いものがあるらしいという、テレビや雑誌の宣伝に乗るかたちで、ぼくは何となく興味を持ちました。アップルの一番安い機種を買って、ぼくはネットというものに入っていました。

インターネットが苦手

ところが、最初ぼくが感じたのは、意外とチープだなというものでした。動画や音声のようなウェブキャストイングが普及していなかったからという意味ではありません。ぼくが見たページが、ことごとくつまらなかったからです。

どうつまらなかったのか、よく覚えてはいないのですが、

たぶんそれは、ぼくの検索能力の低さが理由だったのだと思います。ぼくは今でも、検索がどうもうまくいかないのです。「苦手科目はネット検索」と言ってもいいでしょう。

それと、ぼくがネットを始めた頃に「電子メールからウイルス感染するから危険」のようなニュースがあったので、それを鵜呑みにして、メールそのものを敬遠していた感覚もありました。そして、それとは別の理由で、今でもメールのやりとりと臆病なところがあります。面倒だから電話で話したいのに、それをわざわざ文章で書かなければならないし、誤解があつたらどうしようと、今でも怖いのです。

昔に比べたらだいぶましになったとは思いますが、ネットが苦手という意識は、今でもあります。誰もが当たり前にやっている、検索やメールというものが、どうも上手いかないのです。

ブログ以前

当時、ヤフーに登録されていたページは、ぼくにとつてはどれも退屈なものでしかなかったし、ほかに探す方法を知りませんでした。そもそもぼくは、他人の書く文章にあまり興味がなかったのです。読書も嫌いだし、人に興味もなかったのかもしれない。それは、ぼく個人の病理なのかもしれ

ませんが、今回はその辺はパスします。

インターネットというものと知ったときに、ぼくは、とにかく自分のホームページを作りたいと思いました。読みたいというよりも作りたい、とにかく文章を発表したいという思いのほうが強かったのです。だから、プロバイダーを探すときは、無料で自分のページをどの程度（容量など）作るこれが可能か、BBS（ウェブの掲示板）の有無などを基準に選びました。探すのが得意じゃないけども、そこはきっちり調べました。そしてぼくは「ぷらら」というプロバイダーを選んでホームページを作りました。URL（http://www3.plala.ne.jp）だっと思います。

とにかくぼくは、他人のページをろくに見もしないで自分のページを作ることに没頭しました。エヴァやアキハバラについて書きたいことはいっぱいあったし、「とにかく俺に言わせろ」のような生意気な感じでした。マークアップ言語の参考書を買ってきて、でたらめなCSS（ウェブページのデザインを指示するマークアップ言語）を書いてページを作っていました。ウェブページを作るには、マークアップ言語を自分で書く（コーディングと呼ばれる作業）か、それを自動でやってくれる専用のソフトを買ってこなければならなかった

し、アップロードするソフトも必要でした。ブラウザさえあればいつでも更新できるブログに比べて、はるかに手間も時間もかかるものでした。だけどぼくは、自分で情報を発信できることがとにかく嬉しくて、夢中で更新していました。大した内容ではありませんでしたし、一日当りのアクセスもゼロかそうでないか、程度のものでした。今から思えば、他人の作ったものをちゃんと読んでいれば、多少もつとまじしものを作れたのではないか、とも思います。

当時ぼくは、何か文章を書く前に、興味のある人名や作品名や専門用語などのキーワードページを作り、自分の書いた文章の単語（「エヴァ」「安倍なつみ」など）からそのキーワードページにリンクする、だから文章がリンクだらけというようなページをアップしていました。リンクの数が多くてびっくりした（読みづらい）というコメントを頂いたこともありました。

つまり、はてなダイアリーのようなことを自分でやっていました。だけど、限界を感じていました。モーニング娘。のキーワードページを作るとなれば全メンバーのキーワードも当然作るのだけれど、さほど思入れのないメンバーも正直いまして、その誰々については、ぼくなんかよりもはるかに思入れの強くて詳しいひとが書くほうが絶対よくなるはず

だと感じていました。

だから、はてなキーワードの存在を知ったときに、これは優れたものだと言喜しました。ぼくがはてなに移るのは、もはや時間の問題でした。そしてぼくは、ネットで知を共有する「Web2.0」の世界に踏み込んでいったのです。

はてなに移った

自分でページを作っていたときに、ある時期から、<http://a.hatena.ne.jp/>（はてなアンテナのURL）からのアクセスが増えてきました。はてなアンテナとは、ユーザーが登録した複数のウェブページのリンクを、新しく更新されたものから順にリンク先の更新内容とともに表示するウェブサービスです。ぼくはそれまで、RSS（ウェブページの更新を知らせてくれる規格）も知らなかったし、そのような「動的」なウェブをみて、これは何か面白いことが起こっていると、遅ればせながら感じました。

はてなアンテナからのアクセスが増えたのは、モーニング娘。のことに書くようになった頃です。だからぼくは、はてなを使うモーニング娘。のファンが多かったように感じました。はてなアンテナを使うモーニング娘。ファンは、はてなダイアリーも書いていて、それらのブログを読むために、

まずぼくは、はてなアンテナから使い始めました。

アクセス解析がきっかけで、はてなアンテナ、そして、はてなダイアリー（ブログ）の存在を知ったぼくは、それでも最初はブログに移行することをかつこ悪いと感じていました。それは、ウェブページのデザインを含めて自らがすべてを作ることから生まれるプライドのようなものがあつたと思います。ブログとは既存のデザインだから、ただの日記でしかない。自らコーディングを行うような者にとつては物足りないのです。小学生でもつと凝った作りにするだろう程度の単純なページ構造で、しかも誰も読まないようなページを作っていたぼくでさえも、当時はそう感じていました。

ですが、モーニング娘。ファンで名前を知っているひとがはてなを使ってブログを書いていることを知り、ぼくもはてなでブログを開始しました。もともとブログには興味はなかったのですが、同じ仲間と感じたファンがいるはてなだからこそ、ぼくはブログに移行したのです。だから、はてな以外のブログを書くことは、まったく考えられませんでした。

やがてぼくは、自分でホームページを作をやめてしまいました。先ほど書いたような「こだわり」は、割と簡単に忘れてしまったのです。簡単に更新できるブログを始めたことで更新回数が増えましたし、はてなID（はてなユーザ

「ごとのアカウンツ」でつながるはてな仕組みや、そこでのやりとりは、以前よりも圧倒的に多くの活動範囲を広げたのです。

はてなキーワード

現代用語の基礎知識には、その年ごとの流行語として「はてなキーワード」から、いくつかの内容が掲載されています。この、はてなユーザーが自由に登録し内容の加筆修正が行える「はてなキーワード」は、インターネット時代の新たな情報発信基地となりました。

はてなダイアリーが他のブログと異なるのは、はてなキーワードへの自動リンク機能です。はてなキーワードがもとと「はてなダイアリーキーワード」という名称だったことからわかるように、はてなダイアリーとキーワードは一体のものとして密接に連携しています。

はてなダイアリーでは、日記を書き公開すると、文中の特定の語句が自動的にはてなキーワードのページへとリンクされる機能があります。普通、ウェブページの文章中から他のページへリンクさせるときにはマークアップ言語にて記述します。ブログであってもURLを文章のなかに入れるというように、リンクとは書き手によって意識的になされるもので

す。ところが、はてなではキーワードへのリンクとは、なかば強制的に生成されるもので、出来上がった文章はリンクだらけになります。はてなでブログを書き始めるときに、多くのユーザーにとっては違和感があつたのかもしれない。

それとは意識せずに書いた文章のなかに、事件やニュースに関するものやタレントの名前など、話題となるキーワードが含まれているような場合、そのキーワードからのリンクが集中します。これは、個々のはてなキーワードのページに、誰が（どのはてなダイアリーが）そのキーワードに言及したのかという表示がなされるからです。そして、こちらからもキーワード経由で他のはてなダイアリーを読んでもみようという好奇心も生まれてくるのです。それがきっかけで（同じようなことに興味を持つ）他のはてなユーザーと知り合いになることもあります。また、本人にとって「常識」となっているために書き手自身が気づかず書いてしまう、いわゆる隠語などを含むマニアックな専門用語の解説にもなり、そこから、違う世界を知るきっかけにもなります。

今ではほとんどアクセスがないのですが、ぼくがはてなに移った二〇〇三年頃は、はてなキーワードからのアクセスが多くて、とても驚きました。それまで自分で書いていたページの頃よりも何倍も多かったし、単純にそれは嬉しいことで



“ひきこもり”だけど、人間が好きです。

- 自宅で見てるだけのアイドルファンが、外に出てコンサート体験
- 「“ひきこもり”はリアルな三次元アイドルに否定的」ってホント？
- “ひきこもり”と“おたく”はどこが違う？
- 音楽シーンの「漫画的リアリズム」
- 漫画のようにキャラが立ってる「モーニング娘。」
- 生身の人間としての「アイドル」
- アイドルという「物語」

「アイドルとは何ぞや」「アイドルとアイドルファンの関係」を、
いわゆる“ひきこもり”の視点から語ります。

(裏表紙紹介文より)

ひきこもり。厚生労働省の定義は、

「仕事や学校に行かず、かつ家族以外の人との交流をほとんどせずに、6ヶ月以上続けて自宅にひきこもっている状態」
時々買い物などで外出することもあるという場合も「ひきこもり」に含める

と、なっています。

ぼくは、インターネットで知り合った友人とやりとりをしたり、コミケや文学フリマにもたまに行きますが、それ以外はひきこもりの定義に該当します。そして、精神的に置かれている状況も、ほぼ同じだと思います。なので、今回は、ひきこもりとアイドルについて、考えてみようと思いました。

ぼくは、ハロー！プロジェクト（ハロプロ）が好きなアイドルファンとして、ネット仲間から認識されていると思います。

ひきこもっている者の多くは、アニメや漫画やゲームを趣味としていて、彼らは、リアル社会を想起させる「三次元

の」アイドルについて否定的な態度を取る。そう考える読者がいるかもしれません。ところがぼくは、そうではありませんでした。その理由、どうしてひきこもっているのに「三次元の」ハロプロが好きなのか、好きでいられるのかを、考えてみたいです。

ひきこもりの社会参画を促すというような目的ではなく、ある個人的な着眼点についてのみ、書いてみます。ぼくは、元々はアニメファンでもありました。どうしてアニメからハロプロに移ったのか。まあだいたいそういうことを書いてみたいです。ひきこもりでもアイドルを好きになる、それは別に不思議なことではありません。そういう、ぼく個人のつづきが何かの参考になれば、幸いです。

どうしてアニメに飽きたのでしょうか。そして、どうしてぼくは好きなハロプロのコンサートに行こうと思わないのでしょうか。

ぼくはコミケや文学フリマに行きますし、アイドルファンの友人とも会います。しかし、それは年に数回で、他の日には誰にも会いたくないのです。そして、月に二回行かなければ

ならない病院の医師としか話をする事のない日々を送っています。ツイッターでの仲間とのつながりは重要ですが、そのツイッターの交流でさえも、衝動的にアカウントを消してしまいたくなる事がたびたびで、それがずっと続いているような、どうにも具合の悪い自分の告白でもあります。

そして、本のタイトルを例えば「うつ病患者のアイドル論」とするのには抵抗があるので、「ひきこもり」のほうが、まだ言葉の響きがいい。ぼくはそう考えました。

ドリームモーニング娘。

ぼくはハロプロが好きで、彼女たちのブログやツイッターや動画配信を見ることを、ささやかな楽しみとしています。しかし、ひきこもりなので、コンサートやイベントなどの「現場」に行くことは苦手なのです。そうなのですが、「コンサートは楽しいから、たまにはおいでよ」というファン仲間の声を聞いて、今年の十月にドリームモーニング娘。コンサートに行つてきました。まずは、そのコンサートのレポートを書いてみたいと思います。

「ドリームモーニング娘。」とは、元「モーニング娘。」メンバーが今年一月に結成したグループです。「ドリ娘。」という通称で呼ばれることもあります。ぼくが行ったのは、十月

十六日の公演でした。

「ドリームモーニング娘。コンサートツアー 2011 秋の舞（続・卒業生 DE 再結成）」

二〇一一年十月十六日、中野サンプラザ、昼公演十四時三〇分、夜公演十八時三〇分

ぼくは昼だけの参加でしたから、この日の夜にサプライズ出演した後藤真希と辻希美は見られませんでした。楽しかったです。

コンサートそのものが久しぶりだったので単純に見られてよかったし、メンバー自身が楽しんでいる感じが伝わってきて、よかったです。ぼくは、なつちこと安倍なつみのファンいわゆる「なちヲタ」なのでなつちばかり見ていましたが、なつちはなつちとしか言いようなない魅力でした。キラキラしていました。

なつちのソロコンは二、三回くらいしか行っていないし、ハロプロのコンサートは後浦なつみ（安倍なつみ・後藤真希・松浦亜弥の期間限定ユニット）を見ただけでした。なつちの

ひきこもりのつぶやき2

— ひきこもり、イコール、おたく、なのだろうか？

世間では、おたくは家で漫画やアニメばかり見ているから「お宅」なのだ、と勘違いしている人がいるようですが、本当は違います。ものすごく簡単に説明しますと、「おたく」とは趣味人のことを指します。そして、ひきこもりとおたくが似たイメージで語られるのは、おたくという言葉に元々あったネガティブなものが、世間ではいまだに通用しているからだと思います。

かつて、そうした世間からのイメージを払拭したかった岡田斗司夫は、「教養のない」庶民レベルでは楽しめない、アニメや漫画などの素晴らしさを享受している「貴族」こそがおたくであると論じていました。ネットの普及などで、それらの趣味を安価にそして誰もが楽しむことが可能となった二十一世紀となつて（おたくの基礎知識はネットで調べられるのでハードルが低くなった）、現在の岡田は、おたくをごく簡潔に「理屈民族」と定義しています。それらの岡田の論説をぼくなりにまとめると、趣味を楽しんでいるのがおたくだ、ということになります。

おたくとは趣味人です。しかし、ひきこもりは趣味ではありません。好き好んでそうなっているわけでは、ないのです。たまたま、おたく趣味のひきこもりが（報道などで）目立つだけ、なのです。

おたくは趣味に埋没していて、しかも彼らは行動派です。コミケのような大規模な即売会を廻るには相当な体力がいるし、趣味のためならどこへでも行き（アニメ作品の舞台となつた地方などを訪問する「聖地巡礼」などもそうです）、仲間との交流も盛んです。秋葉原での路上パフォーマンスなど、過激なことも、たまにやります。

コミュニケーションが不得手なおたくだっているでしょう。しかし、そうであっても、勤労などの社会生活に問題がなければ、ひきこもりとは呼べません。

アニメや漫画やネットには、ひきこもりに優しい側面があつて、最適かもしれません。しかし、彼らは、それらを見るためにひきこもっているのではないと思うのです。普通、人間は何かしらの社会的な立場、あるいは自分の顔とでもいえる位置、自分はこういう人物だという存在意義がないと、不安になるはず。おたくだつて、そういう意味では自分を主

張しています。しかし、ひきこもってしまうというのは、それらから離れてしまいたい、社会から隠れていないと潰されてしまうという、どうしようもない状態として、そうになっているのだと思うのです。その点で、匿名で交流ができるネットには、利点があるのです。

そして、ひきこもりが進んでしまうと、ネットからも遠ざかって、誰とも交流しなくなってしまうといえます。それはひきこもりの専門家である斎藤環も語っていて、ぼくもそれを感じています。ツイッターでのやりとりを突然辞めてしまいたくなるのは、ぼくにはよくあることで、それは相手が悪いわけじゃなくて、気分が不定期にシャットダウンしてしまう、自分の駄目なところなのです。

モーニング娘。をテレビで見た

ぼくは一度、大量の漫画やアニメのコレクションを捨てたことがあります。それは、コレクションを集めるだけで「すべて」を手に入れることは不可能だと気づいてしまったからです。集めることが義務感になつていないか、欲しかったものは何だったのか、どうすれば自分は満足するのか、普通に売られているものを購入するだけで得られないものがあつて、そこそこ本当に求めている「何か」なのではないのか、考えるこ

んでしまったのです。そして、自分の部屋の本棚を見て、ものだけがあふれているその無意味さに、うんざりしてしまいました。ぼくはあのとき、おたくをやめてしまったんだと思うのです。

それでもぼくは「ファイブスター物語」だけは読み続けていました。やがて、「新世紀エヴァンゲリオン」のブームがあり、ぼくはあつきりと、おたくに戻ってしまいました。「エヴァ」についてさんざん友人と電話で語り続けました。そしてインターネットの時代が来て、ぼくは「エヴァ」や「機動戦艦ナデシコ」や「少女革命ウテナ」、それから「アキハバラ電脳組」について、友人に話すようなことを、友人が読むためにだけに細々とホームページにアップしていました。

「モーニング娘。」を好きになったのは、ちょうどその頃でした。

それまでは、テレビで見て知っていただけでした。彼女たちはアイドルと呼ぶには「ダサイ」、B級アイドルという印象でした。でも、その「ダサさ」が九〇年代後半にみられた「音楽番組のバラエティ化」にちょうど合っていました。まだ彼女たちのファンではなかったのに、「外」から見ても単

萌えぎのエレン・著

さよなら、エヴァ

「新世紀エヴァンゲリオン」というアニメを中心に、1980年代のアニメ体験なども交えながら語るエッセイ。

(ウェブサイト紹介文より)

はじめに

さよなら、エヴァ。

ぼくにとって、新世紀エヴァンゲリオンというアニメ作品は、確実に何かを残した。それを書いておきたい。これは論ではありません。エヴァの批評ブームは面白かったけれど、ぼくはそれを書きません。

エヴァという作品が自分に何を残したのか。自分はエヴァをどう楽しんだのか。この個人誌で自分は何を伝えたいのか。自分はエヴァをどう楽しんだのか。エヴァを知らない若い世代や、同世代の（どちらかといえばエヴァに否定的な）友達に、何かを分かってもらえるだろうか。

そこで、書きたいことを大きく三つに分けました。エヴァという作品について。綾波レイについて。そして、エヴァが終わったことの再確認。エヴァは、ぼくにとって、いったん終わった作品でした。ぼくは、いまだエヴァに囚われている自分にさよならしたい。だから「さよなら、エヴァ」という

タイトルにしました。エヴァに囚われているとは、どういうことなのか。それを自分の感じたままに書きました。エヴァの「作り直し」の新作映画が四部作シリーズとして公開されていて、その続きが製作されています。ぼくも熱心に見ています。しかし、新作は新作として楽しんでいて一方で、ぼくは過去のエヴァを否定するつもりは、まったくありません。否定ではなく「埋葬」するのです。

それは、過去のエヴァに価値がないことを意味しません。今、エヴァのことを書くのは古いのかもしれませんが、新作が製作されている今だからこそ、旧作のエヴァのメッセージを確認したいのです。

林原めぐみがゲスト出演したNHKの衛星放送の番組で、初めて動いている綾波レイを見て、ぼくは虜になってしまいました。あれから何年も経ったけれど、ぼくは今でも綾波レイが好きです。

この同人誌でぼくは、自分の感じたことだけを書きます。アスカのことが嫌いではないのですが、アスカの記述は一切ありません。碇シンジと綾波レイと、そして自分自身のことについて書いてあります。

そして、この個人誌の執筆中に、ぼくはエヴァの二次創作に
まったく興味がなかったことを思い出しました。なので、そ
のことについても書いてみました。

なお、作品の謎や核心部分について、特に隠さないことを
了承していただきました。

壱 新世紀エヴァンゲリオンとは

作品解説

ウェブで検索すれば分かることですが、十年以上に作られた作品なので知らない読者もいらつしやると思いますので、簡単に説明します。

新世紀エヴァンゲリオンは、一九九五年にテレビ東京系列で放映されたロボットアニメです。ロボットアニメとはアニメの人気ジャンルのひとつで、主人公がロボットに乗り、敵と戦うというものです。

どこからともなく現れる謎の敵から人類を守るべく作られた、人型の巨大ロボット、それがエヴァンゲリオンです。エヴァンゲリオンを操縦するのは、主人公の碇シンジ、綾波レイ、惣流・アスカ・ラングレーの三名で、全員が十四歳の若者です。

二〇〇〇年に世界規模の災害が起こり、人類の半数が滅んで、生態系は破壊される。その災害を調査していた組織が、後に特務機関ネルフと呼ばれる武装集団になります。ネルフの最高責任者である碇ゲンドウは、シンジの父親。二〇〇〇年の災害と関連すると考えられる正体不明の怪物が出現し人類

を脅かす存在となるなかで、ネルフは人型の決戦兵器「人造人間エヴァンゲリオン」を開発。二〇一五年、シンジはゲンドウに呼び出されて、エヴァンゲリオンに乗り、正体不明の怪物「使徒」と戦えと命ぜられる。物語はそこから始まります。

この作品は色々変わったところがあつて、ただのロボットアニメではありません。

エヴァンゲリオンは十四歳の少年少女にしか動かすことができません。そして、よくわからない理由によつて動作が不安定なロボットです。制御不能になり暴走することも珍しくありません。しかし、そのような危険極まりないロボットであるエヴァンゲリオンを使つて戦わなければ「使徒」と呼ばれる敵によつて人類は滅ぼされるというのです。

敵はなぜか「使徒」と呼ばれています。そして、すべての「使徒」を倒した後に、エヴァンゲリオンというロボットを使つて「人類補完計画」が発動される(らしい)のです。しかも、ゼーレと呼ばれる謎の団体から、ネルフの指揮とその計画の遂行を命じられているゲンドウは、実は「人類補完計画」を乗っ取り、何か別のことを画策しているようです。主人公のシンジたちは、そのようなことも知らずに、幾多の戦いで精神的に疲弊していきます。

「人類補完計画」は本当に平和をもたらすのか。そして、ゲンドウの目的は何なのか。そもそも、暴走を繰り返すエヴァンゲリオンとは「何者」なのか。作品は多くの謎に包まれています。

シンジにとって母親のような存在になるのかもしれない綾波レイ。戦闘でプライドを引き裂かれたアスカ。彼女たちの行動も、物語の要である「人類補完計画」と密接に関わってきます。

エヴァンゲリオンを操縦する少年、主人公の碇シンジは深いトラウマを抱えた人物です。そして、彼の救済と、エヴァの登場人物の未来を占う「人類補完計画」がどうなるのかは、シンジの最終的な判断に委ねられます。

ところが、最終回の直前、物語は唐突に、ロボットでの戦闘を描くのをやめてしまいます。ある仮想の場所に主人公たち主要人物は集められ、彼らは自己啓発セミナーを受けて、物語は終わってしまいました。ほとんどの謎の解明は放棄されました。そして、本来の最終回を描くべく製作された劇場版でも、彼が、そして人類が救われたかどうかは、はっきりとは描かれず、見る者によって判断が異なるラストとなりました。

さて、アニメ作りに定評のある製作会社ガイナックスによ

る作画は非常に素晴らしいのですが、スケジュールや予算などの理由により作画が「動かない」回も少なくありません。しかし、「動かない」ことを逆手に取った効果的な演出がなされました。監督の庵野秀明は、それをコストパフォーマンスを上げる手法、情報のコントロールと呼んでいました。

内容を簡単に説明しましたが、エヴァを見たことのない者にとつては、ほとんどが意味不明かもしれません。しかし、実際に見ても「わからない」ことが多いです。エヴァは、とにかく「わからない」作品で、良く言えば、視聴者の想像力にまかせる、悪く言えば、親切ではない作品です。しかし、それゆえに視聴者はその謎について延々と「語る」ことに、とりつかれました。よく自身もそうであり、こうやって今になつて個人誌を書いているのです。

エヴァンゲリオン新劇場版

テレビ版のラストの別バージョンとして製作された劇場版で終了したエヴァ。ブームとなつたが続編が作られることはなかった。そして、この作品は庵野秀明の手で一から作り直されることになります。

テレビ版『新世紀エヴァンゲリオン』、劇場版（『ジ・エン

ド・オブ・エヴァンゲリオン』通称EOE)、ガイナックス製作。そして、作り直される「新作」は、製作がガイナックスから株式会社カラーに移り（監督の庵野が設立）、タイトルも『エヴァンゲリオン』に変更。その『エヴァンゲリオン新劇場版』は四部作の予定で、現在は三作目が公開目前です（二〇二二年の秋に公開予定）。

この「新作」は、ストーリーはほとんど同じだが、より分かりやすいものを目指しています。基本的に「同じ話の繰り返し」ですが、変更点はけっこうあり、物語の結末について大きく変更されるだろうことも予想出来ます。

貳 綾波レイ

綾波レイを好きになった

綾波レイは、謎だらけのエヴァという作品を象徴する、不思議な人物です。無口で頭脳明晰、そして過去の経歴がすべて抹消されているという、ミステリアスな少女です。そして、孤独である。不思議な、まるで月光のような、吸い込まれる、魅惑的な女性であります。

綾波レイと人気を二分するアスカは、明るく元気でプライドの高い少女です。いかにも女の子といった印象のアスカと、陰のある綾波。ぼくは、綾波を好きになりました。はるか昔に恋した女性に似ていたのかもしれませんが。

綾波レイは、エヴァという作品と同様に、好き嫌いがはっきりと分かれるキャラクターです。興味の無い人達には、ただの「暗い女」に見えるかもしれませんが、それでも、日本のアニメ史のなかでも上位に入るほどの絶大な人気を誇るキャラクターとして、多くのファンに支持されました。

彼女の存在がエヴァのブームのひとつのきっかけでもあったと、ぼくは思います。

七 さよなら、エヴァ

純文学としてエヴァ

エヴァという作品に対する批判は度を越えたものとなって、結果的に、監督である庵野秀明への罵詈雑言が殺到した。庵野は、アニメクリエーターとして天才であり、また同時に、アニメ雑誌などで書かれていた様々なエピソードから「変人」である、ということになっており、アニメファンに限って言えば、その賛美や批判には「あの庵野だから云々」のようなニュアンスが常に含まれている。

一九九七年七月一九日の朝日新聞夕刊で庵野は、他者との関わりにもやもやした自分をエヴァでさらけ出したら予想以上にヒットしたので、世の中には病んでいる人が多いのだろうと、分析していた。物語のラストについて庵野は、おたくである自分が、変化を求めず他者との関わりに無関心なおたくに苛立っている、そのような思いが反映されたのだと語っていた。おたくである庵野は、おたくが嫌い。庵野は、主人公のシンジは自分そのものだと言っている。

エヴァとは、純文学のようなものだ。NHKの番組(BSアニメ夜話『新世紀エヴァンゲリオン』二〇〇五年三月二八日

放送)で、そのような視聴者のコメントが読まれていた。ばくは小説を読まないで、純文学というものを読んだことはないが、コメントの意味は分かる。エヴァとは、傑作ロボットアニメであり、謎解きを楽しむミステリーでもあり、主人公の少年が自己の内面を見つめる純文学でもあったのだ。

死と再生

萌えやおたくについて、これまで個人誌で書いてきた。そのきつかけはエヴァだった。「萌えとは何か」という疑問は、「自分とは何者なのか」という、アイデンティティの問題に行き着くだろうと、エヴァを見て感じたのだ。

エヴァは、見る者を自分探しへと向かわせた。もちろん過去にもそのような作品はあったのだが、エヴァはそれを、ものすごく乱暴に行った。主人公たちは、自分とは何者なのかという問いを抱えながら戦闘を続け、それが災いし肉体的にも精神的にもボロボロに傷つく。そのような主人公のさまに激しく共感し、見る者は主人公と一緒に自分探しを行うようになり、作品の終了後もそれは続いていくことになる。

何かと被害者意識を抱くばくのような、エヴァに熱狂し、主

人公の碇シンジに自分に似たものを見出し、シンジと同一化した一部の人達がいた。ここからは、そのような人達をおたくではなく「自分たち」と呼ぶことにする。

ここからは、「自分たち」の問題となる。

『オタクはすでに死んでいる』（新潮社）にて岡田斗司夫は、「オタク」とは「貴族」であるから、そこが問題とはならないと述べている。岡田としては、「オタク」とは、世間の評判や見てくれを無視して趣味を選び取る、強い意志を持つ者たちであったのだという。なのに、どうして萌えを語る者たちはシンジに同化してしまう程に弱いのか。彼にとつては、そこが疑問だったのかもしれない。これまでに岡田は「なんであなたはオタクの代表のくせに萌えがわからないの？」とさござんやじられて、いわゆる萌え派のひとたちと何度も話しあった末に「理解不能」だと判断した彼は、そんな狭い見で他人を見下すような、岡田自身が信じていた「オタク」とはそんな「馬鹿な」ひとたちではなかったはずだけど、現状はもはやそこに戻らないのだから、もうこの「民族」はバラバラになり絶対に元には戻らない、だから「オタクは死んだ」とした。彼の定義する「オタク」像とは、あくまでも彼の理想論でしかなかったのだが、「自分たち」は、世間からだけでなく「先輩」からも見捨てられた格好となった。

萌えとは、自分がどう感じるかのみが重要であり、それはすなわち自己愛となる。そして、自己愛とは、すなわち「対象に自己を見つける」ことで、欠けた自我を埋め合わせる。それは、例えば綾波レイである。綾波についてエヴァの監督である庵野秀明は、おたくが好む典型だと語っている。赤木リツコは綾波を「生きることに不器用」と評した。そして、だから、碇シンジに同化した「自分たち」にとつて綾波レイとは「鏡」となる。多くを語らない謎めいた少女である綾波レイとは、暗闇の象徴であり、その暗闇を見つめるとき、「自分たち」は自分探しへと向かうことになる。

そのような、無の象徴である綾波と一体になることで、「自分たち」は補完されることを望んでいた。そのような、対象と一体となることは、萌えの目指す理想世界のロールモデルとなるのだらうと、感じたのだ。

萌えというキーワードにより一体となる。しかしそれは、自我の消失した、死んだ状態である。それらの孤独の集合体が

個人誌執筆裏話

コミックマーケットC 82(東R 49 a「はなごよみ」二〇一二年八月十二日)にて無料配布した冊子『萌えぎのエレン 同人誌執筆裏話』に加筆修正を行った文章を掲載します。

『萌えはお菓子』

二〇〇八年に頒布された同人誌『どうして女の子のイラストばかり描くの?』にて、萌えについて優れた文章を書いていた押井徳馬さんをお願いして、彼のサークル「はなごよみ」から出した最初の個人誌。それが『萌えはお菓子』です。

この個人誌の元となった、ぼくがブログに書いた「萌えⅡ菓子」という主張(思いつき)は誰の真似でもないし、我ながらよく思いついたものだと思っていたのですが、特にネットで話題になることもなく、死蔵していました。

しかし、ネットで知られていないぼくのような者の書くものでも、コミケのようなものすごく人が集まる場所に晒せば、何万人にひとりでも物好きの目に留まるかもしれない。このまま埋もれさせるのはもったいないというセコい考えから、いったん死んでいた文章を、同人誌という媒体で「再発」してみたのです。

萌えとは性欲か否かという、ネットで見る論争に対しては、どちらでもいいと思うので深く掘り下げなかった。ぼく

が本文に書いた主張は、萌え≠性欲のように読めます。しかし、「ケーキは別腹」という言い方には、リアル社会の浮気を想像させる余地もあります。だから、要するに、どちらでもいい。実はぼくは、その点を問題視していないのかもしれない。オタクと「スイーツ(笑)」との争いには意味がないと結論づけたのもそうです。たぶんぼくは、論争ゲームに興味がないのでしょう。

萌えとは、広く浅くというミイハーな気質が生んだものでもあり、これこれこうであると定義づけたら論じたりする種類のものではない。そういう思いがぼくにはあります。

この個人誌には、桃井はるこへの返信という裏テーマがありました。それは、桃井が主張する「萌えはロック」を、ぼくは超えることが出来なかったからです。この『萌えはお菓子』の元となる、萌えについて長く書いたぼくのブログがあります。その執筆の途中で、桃井はるこという人物が「萌えはロック」と言っていることを知り、これはまずいことになったと感じた。ぼくが主張したかったことは、すでに桃井によつて書かれていた。同じことを書いてもパクリにしかならない。だからぼくは、桃井はこう言っていて参考になると引用した上で、持論である「萌えⅡ菓子」を桃井に知って欲しいと思つて、個人誌を出したのです。献本はまだしていま

せん。機会があれば手渡ししたいと思っっているのですが。

ところで、ぼくには、何かを言おうとして気づいたら全く関係ない話をしているということが、よくあります。それはぼくがブログで書くことや、ツイッターで誰かと会話をするようなときでも同じです。

萌えについて言いたいのに、「はてな」が好きだということや、おたくやオタクや「ヲタク」のこと、エヴァに対する愛憎、そしてハロプロへの思い。それらが『ファイブスター物語』の時間軸のように、過去も未来も次元をも超えて渾然一体となっているのが、ぼくの頭のなかです。先に挙げた萌えについてブログで書いた文章は、ものすごく長くなつて、やはり途中から関係のない話になつてしまつてゐる。放つておくとぼくは、「この人は何を言っているのか?」と思われる人になつてゐるのかもしれない。それでは、相手に何も伝わらない。それでは困る。

だから、これまで様々な場所で書いてきた色々な考えや思ひを分割して、分かりやすくしようと思つた。そこでまず、萌えはお菓子ですよ、という部分だけを取り出してゐた。シンプルに徹したあまり、意外とあつさりした構成になつてしまひ、もつと深い話を聞きたいという読者には、やや物足りないかもしれない。しかし、分かつてもらふにはこのくらいシ

ンプルでいいと思つたのです。

とにかく、ぼくにはまだまだ言いたいことがあつて、それらを細かく分類して項目ごとに主張したい。それをやつておかないと気がすまない。この同人誌から、ぼくの「棚卸」は始まつたのです。

『はてな☆オタク』

ぼくはハロプロファンとして、はてなを使い始めました。それは、はてなでハロプロについて書き語る仲間が多かつたからです。そして、はてな全体のなかでの人気のあるユーザーや記事にも興味を持ち始めました。それは「アルファブロガー」と呼ばれる人気者（ブログの書き手）が中心となつて、賛同はもちろんあり、またディスカッションが起こる場所です。ぼくはそれを遠くから眺めながら、人気者がうらやましくと嫉妬したり、自分もその騒ぎに参加したいけれどぼくの中心はハロプロなので、好きなエヴァの話題で知らないはてなユーザーの誰かと議論を戦わせるなどということには向きだろうなあ、などと感じてゐました。

一方、ぼくは、はてなIDでどこからともなく飛んでくるトラックバックのシステムは乱暴で面白いなあと感じてゐました。予想もしない層から飛んできて、それがきっかけで知

り合うことができるのも、はてな面白いところだなあと感じていました。そのような、はてなのつながりは、ハロプロファンとしてこもっているよりも楽しいと感じるようになってきたのです。もちろん、ファン同士でこもっているのは悪くないし、ファンでない者からハロプロについてあだこうだと悪く言われるのは望んでいません。悪く言われるのは嫌だから、他を悪く言うことは慎まなければならない。それは自分に返ってくるから。

ただとぼくは、広い分野に浅く興味があるというミーハーな気質があり、また、ついつい言わなければいいことを書いてしまうという悪い癖があつて（それらについては四冊目の個人誌『さよなら、エヴァ』に書きました）、ハロプロファンのなかでこもっているよりも、もっと広く浅く、はてな全体にコミットしたいと思うようになりました。

広く浅くと言っても、オタクについての語りとエヴァについての語りくらいしか実際には興味がなかった。それでも、これらの話題に強引にハロプロを絡めて、論とも呼べない適当な文を書いて、突っ込んでいった。「ハロプロはこれこれこうだからオタクとして面白がれる」のようなものだったと思います。

当時ぼくは何をしたかったのかというと、ハロプロファン

の面白さをはてな全体に広めて、「はてな村」のなかで起っているディスカッションのなかに強引に入れてしまおう、というものでした。オタクやエヴァやアニメ漫画など、はてなで話題の中心になっているカルチャーのなかに、「我が軍（ここではハロプロとそのファンを含むトライブを指す）も参加させてくださいよー、そのほうが面白いですよ」と、信じていたのです。

結果は、上手くいかなかったと思います。ぼくでない誰かが意識的にそれをやれば面白くなったかもしれません。でもぼくは、どうも発言が論理的でなく、支離滅裂で、ときに会話にならない（ぼくが適切に返事をしないことが理由で）。

ハロプロファン同士の面白いやりとりと、いわゆるアルファブロガー界隈の面白いやりとりとは、何かが違う。質が違うのか文化が異なるのか。ぼくがハロプロファンとして感じたのは、ファンの中心は好きになった（アイドルと呼ばれる）その子であり、アイドルという虚構性の高い彼女たちといえども、それはやはり人間であつた。オタクやアニメのファンの中心は作品やキャラクターで、それはつまり、架空の世界となる。ぼくがハロプロを好きになったのは彼女たちがキャラクターとして優れていることが出発点でしたが、ぼくは気がつく彼女たちそのものを、つまり人間として好きになつ

ていた。

はてな内に見られるユーザー同士の騒動にコミットしても、ぼくには得られるものがない。なぜなら、ぼくはすでに「ただの」ハロプロファンでしかなくなってしまったから。だから、自分の「外側」で起こっている騒動について、興味深く書くことが、もうできなくなっていたのです。ましてや、揉めるのははてなそのものが揉め事を起こしやすい構造だから云々とか、もうどうでもよくなった。

ぼくは今でもアルファブロガーのような人気者に嫉妬していますけれど、文章の才能もなく、打たれ弱い自分は、そこに関わらないほうが良いのだと、もういい加減に悟らなければならぬのです。

というような、自分のなかでの「混乱」がバックボーンとしてあり、この個人誌では、はてなとオタクと、そしてハロプロファンとしての自分について、思うところを肯定的に書き記したのです。それを要約すると、インターネットが苦手で、アイドルファンとしてもアニメファンとしても中途半端な「こうもり」のような自分でも、自分から騒ぎを起こさなければ、居心地が良いし、ぼくは今でもはてなが好きです、ということ。その、どうしてはてなが好きなのかを、この個人誌に書いたのです。

繰り返になりますが、現在のぼくはツイッターで書くことが多いけれど、ダイアリーもはてブもハイクも、辞めるつもりはありません。

『ひきこもりのアイドル論』

まずここで原稿執筆時になかった追記。真野恵里菜は二〇一三年二月にハロー！プロジェクトを卒業しました。今後は女優として活動が続けていくとのこと。おめでとうございます。

そしてこれも最近の出来事ですが、あるタレントがツイッターでエゴサーチ（自分の名前でウェブ検索すること）していたときに、殺人予告ともとれる書き込みを発見し、それを公表したことがありました。また、タレントと同姓同名のツイッターアカウントで品性下劣な書き込みを続けていた者もいました。これらの例に比べて、アイドルタレントに対する性的な妄想をウェブで書き込む行為は、犯罪性は低いと思います（「犯す」「襲う」のような言葉でなければ）。

ぼくが知る限りにおいては、アイドルタレントについての性的な書き込みは、明らかに卑猥なものよりも、「ペロペロ」「萌え」と形容されるような、間接的な表現にとどまっているようです。そういう種類の書き込みでは、ユーモアとセンス

が問われるのだらうと思います。

ツイッターを使い、日頃はごく限られた仲間内で楽しくやりとりをしていても、公開された状態で行う限り、第三者に読まれる可能性が当然あるわけで（ツイッターは非公開設定も可能）、しかも、読む行為は「覗き」ではなく完全に合法です。予想外に自身の発言がリツイートされ「拡散」されてしまう。それはウェブの面白いところでもあります。ひと昔前に流行った、自分のブログへのトラックバック禁止（見ず知らずの者に広められたくない！）のような発言には意味がないうと、個人的に感じています。

前作の『はてな☆オタク』でもハロプロファンである自分について書きましたが、今回はその続きにもなっています。アイドルとして活動しているハロプロメンバーには、アイドルを演じる快感があること。そして辛いのなら辞める選択も仕方ない。まあだいたいそのようなことを、この個人誌では書きました。

この個人誌では、これまでの「オタク」表記が「おたく」になっただけなのですが、深い理由はなかったと思います。実際には「おたく」と「オタク」の違いを書こうと考えていたのかもしれませんが。

「ただのアイドルファン」と自称しましたが、元々はモ

ーニング娘。がアニメのキャラクターのように素晴らしいと感じてモータリタになり、やがてアニメを見なくなる、そのような自分は「ただのアイドルファン」なのか。ファンとしてのどの辺りの位置にいるのか。そもそも自分はアイドルファンなのか。結論は、ぼくはハロプロファンではあるがアイドルファンとは言いがたい（ハロプロ以外のアイドルに興味がない）。そしてぼくは「現場」に行かない。

ぼくは、ハロプロをいわゆるアイドルとして見ていません。彼女たちはアイドルのようなことをやっているし、メディアでもアイドルとして取り扱われている。そのことに不満はありませんし、個人誌のタイトルにも通りの良いアイドルの語を使っています。しかし、それらは便宜上そうしているだけであって、ぼくの感じるころは違う。でもそれを適切な言葉で説明できたことが、これまでなかった。「アイドルではなくアーティストだ」という言い方もぼくはしない。以前ぼくはハロプロをアイドルではなく、みんなの発言を流用して「ロククという考え方を体現する存在」だと評したけれど、あまり良いレスは得られなかった。そして、この個人誌でも、それをはずきりと言葉にすることはできなかった。

『ファイブスター物語』に出てくるスーパーロボットを引用して、「モーニング娘。Ⅱレッドミラーージュ」（レッドミラー

ジュが対モーターヘッド戦闘のためではなくスタント遊星戦を想定して生み出されたように、モーニング娘。は他社のアイドルと戦っているわけではなく、もっと大きな敵と戦うために存在している」という例えが個人的にはしつくり来るのですが、そのためには『ファイブスター物語』の説明から行わなければならない、その記述は膨大になるだろうし、しかも「分かりづらい」ことが特徴のひとつでもあるこの漫画の説明したところで、まったく伝わらないかもしれない。なので、これも使えませんでした。

結局ぼくは、ハロプロがアイドルかどうかといった記述を止めて、自分にとってハロプロがどうかという私的な文章のみを書くことにしたのです。それには別の理由もありました。

ぼくはハロプロ以外のアイドルの悪口を言う悪い癖がありました。ぼくはハロプロ以外のアイドルの悪口を一言も書いていません。それは、ぼく自身がハロプロの悪口を言われるのが嫌なので、だったらこちらでも相手の悪口を言うのは止めようという、ごく当たり前のことでした。下手をすると「他のアイドルと比べてハロプロはこうだから優れている」というような書き方をしてしまうかもしれない。けれどそれは他をけなすことになるので、やりたくない。「最近のアイドルに比べてハロプロは古いよね」などと言われると頭に來ますからね。

ぼくがトゥギャッターで毎日ハロプロまとめを行っている(<http://togetter.com/id/welovehello>)のも、世界はハロプロとそのファンに満ちているということを残しておきたいという思いがあるからです。一部のマスコミがハロプロを一切取り上げずに他のアイドルグループを中心にアイドルを報道する、そういう奴らに對しての抵抗でもあったのです。

ではありますが、この個人誌を書いた頃よりも、マスコミがハロプロを取り上げる機会はいぶ増えています。ありがたいことです。

この個人誌では、バーチャルアイドルこそがアイドルの理想形だという論調への、ささやかな反論も行っています。参考文献として引用しなかったのですが、大塚英志は『「おたく」の精神史』（講談社、二〇〇四年）にて、女性アイドルの困難さを述べていました。女性アイドルは「情報」として商品化され、若い女性たちが生身の肉体や言葉を捨て「情報」であり続けると、いずれ精神に支障をきたし、そのために自殺しなければならなかったアイドルもいたという。だから若い女性にアイドルを演じさせることには苦痛や困難が伴う。大塚の論はだいたいそのようなものであり、ごく親しいゲームファンの友人も同様の見解でありました。

そのようなものの見方はあるだろうし、ハロプロを好きに

なる以前の、アニメファンだったばくならば、そのような考えたったのかもしれませんが。

かつてばくは、ブログなどで書いた「アイドルⅡキャラクター論」を、いつか完成させようとしていました。しかし、これを追究すると、初音ミクのようなバーチャルアイドルこそが真のアイドルだという結論になってしまいかもしれない。また、「アイドル戦国時代」のような、近年になってのある種の商業主義的な（「アイドルは儲かるらしい？」実際にはそうではないと思うのですが）、そして、いつてしまえばバズワードとして使われてしまっている「アイドル」という言葉の意味あいに沿って、アイドル評論家のように振舞うことも、ばくは避けたかった。

そのような経緯があつて、ハロプロを肯定するために、ばくは「論」を止めたのです。そして、ハロプロを擁護しようとしたのです。

アイドルが虚構の産物であることは誰もが知っている。それでもなお、どうしてアイドルファンがアイドルを好きでいられるのか。それを自分なりに書いたつもりです。それらは、あくまでも個人的な感情でし、ばくの個人的な見解がアイドルファンの総意ではありません。そうではありますが、ばくが書いたささやかな文であつても、もしかしたらハロプロ

の、そして近年の女性アイドルの魅力の本質的な部分を説明する際に応用できるかもしれません。そうであればいいなあと思っています。

最後に、なぜ「ひきこもりのアイドル論」なのかについて、いちおう説明しておきます。それは、「ひきこもりにアイドルを語ることが可能か？」というものでした。それは、「現場」に行つてこそアイドルファンだと、ばく自身が感じていて、また、ひきこもりの人達は、アニメや漫画やゲームが好きなのだろうという、ばく自身の偏見もあつたからでした。

モーニング娘。やドリムモーニング娘。のコンサート、そして、モーニング娘。コンサートの翌日に偶然にも立ち会えたスマイレージの新宿アルタ前のイベントを観て、なるほど「現場」で感じる素晴らしさは自宅とは違うものだ、それは分かったつもりです。譜久村聖や竹内朱莉のパフォーマンスは生で観たからこそ素晴らしいものだと感じた、そういう体験もしました。それでもばくは、じゃあ積極的に「現場」に足を運ぼうというところには至らなかつた。

どうして人と会うこと（社会的な責務を要求されるコミュニケーション）が苦手なことに閉じこもっている自分が、アニメよりもハロプロを選んだのか。それは個人誌に書いたつもりですが、要約すると、ばくは最終的に人間の味方になった、

ということになるでしょうか。

いちおう書いておきますが「おたくⅡひきこもり」ではありませんし、「現場に行かないアイドルファンⅡひきこもり」でもありません。ぼく自身も厳密に言えば「ひきこもり」の定義には、あてはまりません。

それでは、現在の自分がこうなっているのはなぜなのか。その答えはまだ出ていませんけれど、それならば、やはりエヴァについての自分語りを書かざるを得ない。なので、次の個人誌は、この『ひきこもりのアイドル論』に入れるべきだった、エヴァの話になったのです。

『やよひの、エヴァ』

前作『ひきこもりのアイドル論』のなかで、ぼくの宇宙のなかにある「安倍なつみによる人類補完計画」について軽く書きました。アイドルとファンとが一体となるような世界が理想なのだという、例え話でした。ですが、そういう話を書いたのであれば、やはりぼく自身が深く影響を受けたこのエヴァという作品について、書かないわけにはいかないだろう。それでも、このタイトルを出すことには、ものすごく抵抗がありました。ぼくが書きたいのは最新作の『エヴァンゲリオン新劇場版』ではなく、昔のエヴァ、『新世紀エヴァンゲリ

リオン』についてです。だから、「今さらエヴァじゃねえだろ!」という危惧もありました。

だけど、これは書いておかねばならない。今の自分がこういう状態になっているのには、エヴァを観て感化されたことと、まったく関係がないことはないだろう。そして、今の状態でいい、このままでいいとも思っていないので、エヴァについて自分のなかにこびり付いている「こだわり」を捨ててしまいたかったのです。

『さよなら、エヴァ』の裏話は他に比べて短いです。エヴァについて自分語りをしてしまうと、表も裏も無くなるのかもしれないですね。

エヴァについては最新作『Q』の個人誌『綾波レイはどこへ消えた?』(はなごよみ、二〇一二年)も出したので、よかつたらそちらも読んでみてください。